

## 1. 当四半期決算に関する定性的情報

## (1) 経営成績に関する説明

当第3四半期累計期間におけるわが国経済は、政府の経済・金融政策の効果による円安や株価上昇が進み、輸出環境の改善や個人消費の回復により企業収益に持ち直しの動きが見られるなど、景気は回復基調で推移いたしました。

このような状況のなか、当社は新機種の拡販、新たなマーケットの開拓、海外販売体制の強化に取り組んでまいりました。

当第3四半期累計期間における売上高につきましては、大型包装ラインの販売実績が大きく寄与したことから、前年同期に対し233百万円増収の3,385百万円(前年同期比7.4%増)となりました。

利益面につきましては、増収に伴う売上総利益の増加に加え、販売費及び一般管理費を前年同期より抑制した結果、営業利益は165百万円(前年同期比1,181.3%増)、経常利益は168百万円(前年同期比475.9%増)、四半期純利益は116百万円(前年同期比433.2%増)と前年同期と比べ大幅な増益となりました。

当社は、自動包装機械製造事業の単一セグメントであります。単一セグメントを品目別に分類した場合における品目別売上高の概況は次のとおりであります。

給袋自動包装機は、販売台数が減少したことから、売上高は1,203百万円(前年同期比36.5%減)となりました。

製袋自動包装機は、販売台数が増加したことから、売上高は423百万円(前年同期比154.8%増)となりました。

包装関連機器等は、大型包装ラインの販売実績が増加したことから、売上高は1,065百万円(前年同期比186.7%増)となりました。

保守消耗部品その他につきましては、保守案件の実績が減少したことから、売上高は693百万円(前年同期比3.8%減)となりました。

なお、当社の各四半期の売上高は、受注案件の売上計上時期の偏りと高額案件の有無等により、大きく変動する傾向にあります。一方、販売費及び一般管理費は比較的変動が少ないことから、利益につきましても、売上高に大きく影響されることとなり、各四半期の業績は大きく変動する傾向があります。

## （2）財政状態に関する説明

## （資産）

当第3四半期会計期間末における流動資産の残高は4,233百万円となり、前事業年度末に比べて475百万円増加いたしました。この主たる要因は、売上債権及びファクタリング方式により譲渡した売上債権の未収額の合計額が166百万円増加したこと、現金及び預金が137百万円増加したこと等によります。

固定資産につきましては、当第3四半期会計期間末残高は925百万円となり、前事業年度末に比べて21百万円増加いたしました。この主たる要因は、無形固定資産が27百万円増加したこと等によります。

この結果、総資産は、前事業年度末に比べ497百万円増加し、5,158百万円となりました。

## （負債）

当第3四半期会計期間末における流動負債の残高は2,138百万円となり、前事業年度末に比べて435百万円増加いたしました。この主たる要因は、前受金が265百万円増加したこと、仕入債務が185百万円増加したこと等によります。

固定負債につきましては、当第3四半期会計期間末残高は97百万円となり、前事業年度末に比べて5百万円増加いたしました。

この結果、負債合計は、前事業年度末に比べ441百万円増加し、2,236百万円となりました。

## （純資産）

当第3四半期会計期間末における純資産の残高につきましては、利益剰余金の増加等により、前事業年度末に比べ55百万円増加し、2,922百万円となりました。

## （3）業績予想などの将来予測情報に関する説明

今後の見通しにつきましては、顧客企業の設備投資需要が不透明な状況となっている中、国内外での競争は厳しさを増してきており、受注環境は引き続き厳しい状況となることが予想されます。

このような状況の中で、当社におきましては、新機種の拡販、新たなマーケットの開拓、海外販売体制の強化などに取り組み、売上高の確保を目指してまいります。

業績の見通しにつきましては、当第3四半期累計期間までは計画をやや上回って推移しており、通期の売上高につきましても計画数値は達成できるものと現状は見込んでおります。

以上により、平成26年7月期の通期の業績予想につきましては、平成26年3月4日発表「平成26年7月期第2四半期決算短信〔日本基準〕（非連結）」の業績予想値と変更はありません。